

インタビュー

## 「生活している人」たちとともに

みやさだあきら  
宮定 章 さん



30代 男性 西宮市在住

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 博士前期課程修了、神戸大学大学院自然科学研究科地域空間創生科学専攻 博士後期課程修了。「特定非営利活動法人 まち・コミュニケーション（以下まち・コミ）」代表理事。大阪大学在学中にまち・コミに参加、卒業後も御蔵のまちづくりに関わり続ける。

まち・コミは、2012年3月から、東日本大震災の被害を受けた宮城県石巻市雄勝町で支援活動を開始。宮定さんは、住民の方々の生活再建のために、住民自身の気持ちを言葉にして伝える作業を手伝う。現在も月に約20日間は雄勝町に滞在する。

『震災が残したもの 7』でもお話を伺っている。

「雄勝町の若者が、『街がなくなる』と、神戸に飛び込んできたんです」

その若者は、高台移転だけでは街がバラバラになってしまうことを危惧し、助けを求めてきた。震災から一年経って、マスコミにも東北の学者たちにも取り上げてもらはず、神戸までやってきたのだと言う。そして宮定さんは雄勝町に通い始めた。現地での滞在先は、レストランのオーナーの家。宮定さんの活動を聴いているうちに「うちに泊まってもよいよ」と

申し出てくれた。

雄勝町では現地の方の生活を知るために、漁師の方の船に乗せてもらって作業をしたり、農家の手伝いをしたりする。

「僕は浜の生活を知らないので。現地で生活したり体験したりすることでわかることがある。それをわかったうえで、調べたり質問したりするほうがいいんです」

時には地域のリーダーと一緒に住民をまわり、一人ひとりの考えを聞いていく。聞き取りは家族の歴史を遡り、何時間、何日間にも及ぶ場合も。そのなかで、住民自身から主体性のある考えが出てくることがある。宮定さんは言う。

「外部者は、信じて待つんです」

一方、阪神・淡路大震災から20年目を迎える神戸市長田区の御蔵では、人口は地震前の八割に戻った。しかし当時地元の89%の人が「戻りたい」と言っていたなか、実際に戻ったのは27%だった。

「区画整理での建築制限や仮住まい先での生活構築で、多くの人が戻ってこられなかった」

宮定さんが東北での活動を続けるのは、神戸でまちづくりの大変さを見てきたからだ。東北での活動中に、神戸で解決していない問題と遭遇することもあると語る。

宮定さん自身に、阪神・淡路大震災が残したものは何かを尋ねてみた。

「神戸に地震があってもなくても、今と同じようなことをしていたと思います。御蔵には、住民の方々が関わって作った共同住宅『みくら5』があって、そこでたくさんの人と会えた。こういうところがあったらしいな、と思い描いていたような現場でした」

そして笑いながら言う。

「阪神・淡路大震災があって御蔵に来たから、教科書で勉強していたのではわからない『生活している人の気持ち』に触れることができました。だから20年経っても、関わり続けていられるんです」

2014年9月13日

神戸市長田区 うどん屋「七福」にて

聞き手・石丸由紀子、久米麻子